
バカとリリカルと召喚獣

白萩之右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとリリカルと召喚獣

【Nコード】

N1077L

【作者名】

白萩之右

【あらすじ】

Fクラスに起動六課フォワード陣がやってきたクロスバーなお話。とりあえず設定、キャラ崩壊注意です。

第零話 プロローグなだけでプロローグになってない気がする

バカテスト

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上にさらに悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

高町なのはの答え

- 『(1) エースオブエースだつてたまには撃墜される』
- 教師のコメント
- 意味合いはあっていますが、そんなことわざはありません。

スバル・ナカジマの答え

- 『(2) 泣きつ面に振動破砕』

教師のコメント

君は鬼ですか。

私立聖祥学園。他校との交流が盛んなことで有名な高校だ。その

他校交流の一環として、文月学園との生徒交換が催される。聖祥学園からは、九名の生徒が選ばれた。その九人の生徒が、文月学園に嵐を巻き起こすことは誰もまだ知らない……というか嵐が巻き起こるかどうかもわからない。

次回に続け。

第零話 プロローグなんだけどプロローグになってない気がする（後書き）

これはバカテストとなのはのクロスオーバーです。プロローグなのにバカテストがメインになってしまいました。正にこの小説はまだ始まってすらいらないという状態です。次回からはちゃんと書きます。軽いノリで書いていきますが、読んでいただけたら幸いです。

第一話 それは不思議な出会いというわけではない

バカテスト

問 以下の問に答えなさい

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

ヴィータの答え

『アイ+ゼン=アイゼン』

教師のコメント

ベンゼンです。

スバル・ナカジマの答え

『マツハベンゼン』

教師のコメント

あとでヴィータさんと一緒に職員室に来るように。

Fクラス

「ねえ雄二」

「なんだ？ 明久」

朝のHRがまだ始まる前の時間、吉井明久は坂本雄二に話しかける。

「確か、交換生が来るのって今日だったよね？　どんな人が来るのかな」

「まあ、どんな奴が来てもFクラスには関係のない話だ」

「えっ、なんで？」

「交換生にも振り分け試験やらせるって言うてたろ。そこに、Fクラス行きのバカを送ってくると思うか？　関係あるのはAかB辺りだ」

「そっか。ウチのクラスには関係のない話か。ちょっと残念だね。」

明久と雄二が交換生ついて話をしていると、二人の美少女が教室に入ってきた。姫路瑞希と島田美波である。

「おはよう。アキ、坂本」

「おはようございます」

美波と瑞希が、それぞれ挨拶をする。

「ああ、おはよう」

「おはよう。姫路さん、美波」

雄二と明久も、それぞれ挨拶を返す。

「ところで、二人でなんの話してたのよ」

「いや、明久が『交換生にどんな男が来るか楽しみだぜフヒヒ』っていやらしい顔をしたもんでな」

「やっぱりアキって男が好きだったのね！！」

「いけません明久くんっ。他校の男子生徒に手を出すなんて」

「『やっぱり』ってなに！？　僕そんなこと一言も言っただけからね！！　雄二キサマー」

明久が雄二に掴み掛かった。雄二もそれに応戦し、取っ組み合いを始める。

「なんじゃ朝から騒々しい」

「……………静かにしてほしい」

取っ組み合ってる二人に話しかけてきたのは、木下秀吉とムツツリーニ（本名土屋康太）だ。

そうこうしている内に、朝のHRが始まるのを告げるチャイムが

鳴り、明久達は自分の席についた。座布団と卓袱台だが…。少しして、教室のドアが開き、このクラスの担任である鉄人が入ってきた。鉄人というのは生徒からのあだ名で、本名は西村…。とりあえず西村教諭である。下の名前って出てたっけ？

「お前等も知っていると思うが、今日は聖祥学園から交換生が来るからな」

鉄人が交換生について話し始めたが、明久はFクラスには関係ないことだと思い聞き流す。それよりも放課後の予定をどうしようか考えていた。

「というわけで、入ってきてくれ」

自分の家で雄二とゲームでもやるうか。そんなプランを立てていた明久に、なにか違和感のある言葉が聞こえた。ん？ 今、鉄人が重大なことを言わなかったか？ 明久が頭の中で惑っていると、見知らぬ生徒が九人教室に入ってきた。文月学園の制服を着ているが、他校から来た雰囲気だ。

「じゃあそつだな。右から順に自己紹介をしてくれ」

鉄人に促され、九人の生徒が鉄人から右 明久から見ると左にか
ら自己紹介を始める。

「はじめまして。高町なのはといいます。私立聖祥学園二年六組です」

「同じく二年六組のフェイト・T・ハラオウンです」

「八神はやてです。よろしゅう」

「シグナムです。」

「ヴィータだ。ヨロシク」

「スバル・ナカジマです」

「ティアナ・ランスターです」

「エリオ・モンディアルつていいいます」

「キャロ・ル・ルシエです」

Fクラスに、感嘆の声が漏れる。それもそのはずだ。ドキッ 男
だらけ（秀吉、瑞希、美波のぞく）の中に、いきなり九人の美少女

がやってきたのである。ちなみにエリオはれつきとした男で、ちゃんと男子の制服を着ているが、その中性的な容姿と他が皆女生徒なのが原因で、女だと思われる。

それはともかくとして、一つ大きな疑問がある。

「鉄じ……じゃなかった西村先生、なんで交換生がFクラスに？」

明久がその疑問をぶつけた。先程雄二が言ったように、向こうが学力の低い人材を送ってくるとは考えにくい。ならば、答えは自ずと限られてくる。

「やっぱりバカなんですか？」

明久が前フリを台無しにしてしまった。そこは『なにかの手違いじゃないんですか？』とか言ってほしかったのに。

「誰がバカだコノヤロー」

ヴィータが明久の言葉に怒りを顕にした。当然である。しかし、明久とて悪気があったわけではない。本人としては、『Fクラスに仲間が増えた。わーい』という気持ちで発言したのだが、バカなのでとても失礼な形になってしまっただけだ。かくして明久は交換生に、『何かひどい人』という印象を抱かせたのであった。

朝のHRが終了し、一限目の授業が始まる時間となった。しかし、Fクラスでは授業が行われていなかった。行われているのは、交換生の歓迎会だ。といっても、試験召喚システムや召喚獣の操作について教わったり、Fクラスの生徒と会話したりする程度である。それでも教室内は、美少女が三人（秀吉含む）から十二人（エリオ含む）になったという事実で、満足感があふれていた。

「おいっ吉井明久！ アタシと召喚獣で勝負しろ！！」

そんな中、ヴィータが明久に召喚獣勝負を申し込んできた。

「えっ？ いいけど、何で僕？」

明久が少し戸惑った表情で聞く。

「もちろん、親睦を深めるために召喚獣をフルボッコにして、痛み
のフィードバックの中、アタシ達をバカ呼ばわりしたことを後悔さ
せるためだ！」

「ちよつとまって！ それじゃ親睦深められないよっ！！」

恐らく、他の生徒にフィードバックについて聞いたのだろう。ヴ
イータは、悪人のような顔をしていた。

「おっ、何だ。面白そうじゃないか。アウェイケン
起動」

ヴィータと明久のやり取りを見学していた雄二は、見ものだと言
わんばかりに、白銀の腕輪を起動させる。

「ヴィータとかいったか？ これで召喚獣が喚び出せるようになっ
たぞ」

「おお、ワリーな」

ヴィータは雄二に感謝の言葉を述べる。そして、召喚獣を喚び出
した。

「覚悟しろ！ サモン
試獣召喚！」

幾何学的な魔法陣が浮かび上がり、ヴィータの召喚獣が現れる。

その姿は、真っ赤な服と帽子そしてハンマー、要するに、バリアジ
ヤケット姿である。

「くっ、やるしかないのか。サモン
試獣召喚」

召喚獣まで出されては、引くわけにはいかず、明久も召喚獣を喚
び出す。

こうして、鉄人黙認のもとヴィータ対明久の召喚獣対決が始まっ
た。

不意に朝、雄二が言ったことを明久は思い出す。

Fクラス行きのバカを送ってくると思うか？

このとき明久の脳内に、交換生達がFクラスにいるのは何かの手
違いではないのか、という考えが浮かんだ。同時に、フルボッコに
される可能性大、という恐怖も生まれてきた。そんな恐怖の中、点
数を確認すると、

□	Fクラス	吉井明久	VS	交換生
	ヴィータ			
現代国語	70点	VS		
	71点	□		

まさかの点数である。

「やっぱりバカだったのっ!？」

明久は思わず叫んでしまった。その言葉に、ヴィータが怒る。

「オマエより一点上だからバカじゃねえっ!」

やっぱりバカだった。

「いづくぞおお」

そう言っつてヴィータが、召喚獣を突進させる。だが召喚獣慣れしている明久に、そんな攻撃は通用しない。かわして、カウンターで勝てる。明久が勝利への道筋をたてていると、

「おや、さっそく召喚獣を使っているのかい？」

文月学園の学園長、藤堂カヲルがFクラスに入ってきた。

「あつ、ババア長」

学園長にとられている隙に、ヴィータの召喚獣が明久の召喚獣をハンマーで殴りつける。攻撃は見事に、頭にクリーンヒットした。

「ぎゃあああ! 痛いっ、すごく痛い!」

明久は痛みのみあまり、手で頭を押さえて床に転げ回った。

「はっはっは。ザマーミロ」

バカ呼ばわりされた恨みを晴らしたヴィータは、可笑しそうに笑う。

「何をやっているなさね」

そんなやり取りを見ていた学園長は、呆れた様子であった。

「手違い？」

交換生一同がそう口を開いた。

「ああ、そうさね。本当は、Aクラスだったんだが、間違えてしまつてね。すまなかつた」

学園長が謝罪した。やはり手違いだったのか。Fクラス全員が、落胆した。しかし、ここで新たな疑問が生まれる。ヴィータのあの点数は何だったのか。だが、その疑問も学園長の言葉で解決した。
「高町なのは、スバル・ナカジマ、ヴィータはの三名はFクラスさね」

九人中、三人がバカだった。

「あつ、あの」

フェイトが学園長に声をかける。

「何だい？」

「私も、Fクラスでいいですか？」

「！？ 本当にいいのかい？」

学園長が、驚いた様子で聞き返す。

「はいっ。なのはがいますし」

「そうかい。なら構わないよ」

「あつ、それならスバルがいるんで私もいいですか？」

「うちも面白そうやし、こっちにしようかな」

「主がそう言うのなら、私も」

「僕も皆と一緒にがいいです」

「私も」

フェイトのFクラス行きが許可されると、残りの五人もFクラス行きを志願した。こうしてFクラスには、一気に九人の生徒が増えたのである。

第一話 それは不思議な出会いというわけではない（後書き）

というわけで一話目です。ヴィータが一人大活躍です。今後は、他の人も活躍します。

大人数を書ける自信がないので、九人にしました。ぶっちやけ九人でも多いです。ですが、その内九人以外の人も出す予定です。

感想御意見等いただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1077/>

バカとリリカルと召喚獣

2011年9月11日20時05分発行